



真心の行動  
慈愛の奉仕  
平和に挺身

青い空 緑の山と風  
黄色のうねりは  
人類の理想 文化を表わす。  
それらが混然一体調和して  
ロータリーの理想に向けて  
昂って行く姿を示している。



# Weekly Report

## 四つのテスト

言行はこれに照らしてから

- 1 真実かどうか
- 2 みんなに公平か
- 3 好意と友情を  
深めるか
- 4 みんなのために  
なるかどうか

## 第274回例会報告 (6/19)

(1995年～1996年度第47回例会)

司会 SAA委員会委員長 佐伯 和廣  
 ◎点鐘 直前会長 宮本 誠  
 ◎ロータリーソング ソングリーダー 藤本 吉文

「我等の業い」

◎お客様紹介 直前会長 宮本 誠  
 藤田 育男様 (東京町田RC)  
 メッテ・アルス・オールセン様 (交換留学生)

◎会務報告 直前会長 宮本 誠

先週土曜日に、メッテの地区の今年の留学の終了式が行われ、メッテがトップバッターでスピーチを行いました。なかなか良いスピーチで、ホストファミリーの皆さんが来られていたのですが、最後には感極まって、泣き出す方もいらっしゃいました。他の留学生も大変良いスピーチをしておりました。ガバナーから学校に対して感謝状、メッテから記念のたてなどが出ましたので、17日会長・幹事と私とで富士見ヶ丘高校へ行きまして、校長・担当の先生にお会いいたしまして、当クラブからのちょっとしたお礼の品と、地区から来ました感謝状などをお渡しいたしまして、お礼を言って来ました。

◎幹事報告 副幹事 須藤 起雄

東京西南ロータリークラブより例会変更のお知らせが来

ております。

7月30日(火)→夜間例会 18:00～

8月13日(火)→休会

## 委員会報告

◎ニコニコBOX親睦活動委員会委員 内田 茂男

藤田育男様：本日はよろしくお願いたします。

津守 弘範：遅くなりましたが先日のアバホールオープン、皆様ありがとうございました。

小城 章員：今日は、しずかですね。先日、松原さんにお会いしました。

森田 舞子：梅雨の晴れ間、よろこばしき限りです。大きなレインボーが見られました。まるでオズの魔法使いのようです。

杉田 誠：カルガリーの国際大会に出席の方には絶対保険は払いません。

小林 和夫：先週、休会したので、本日は。

## 東京多摩グリーンロータリー・クラブ

会 長：萩生田茂夫 副委員長：吉尾善太郎 山崎 光一  
 幹 事：橋口 洋三 委 員 平野行廣・飯島裕美・根本泰守  
 会報委員長：小城 章員 関岡俊二・城倉正博・戸田昭寿

事務局：東京都多摩市落合1-9-1  
 多摩センタービル7階  
 TEL 0423-72-6463/FAX 0423-72-6491

例会場 多摩そごう7F バンケットルーム

例会日 毎週水曜日12:30 月の最終例会18:30

藤本 吉文：国際大会に出席の皆さん、無事帰って来られる事を願って。

内田 茂男：カルガリー一行のご無事を祈念して。

伊澤ケイ子：お休みが多くてすみません。

田中 實：あつくなって来ました。

本日合計 金26,000円 本年度累計 金1,355,464円

◎出席報告 出席委員会副委員長 小坂 一郎

会員総数	55名(1名出席免除者)
出席者数	44名
本日出席率	81.48%
6/5出席率	81.48%

■メイクアップ 9名

足立潤三郎(国際大会)

赤尾 恭雄(国際大会)

遠藤 二郎(国際大会)

萩生田茂夫(国際大会)

橋口 洋三(国際大会)

伊藤 英也(国際大会)

城倉 正博(国際大会)

吉沢 洋景(国際大会)

伊神 稔(地区国際青少年交換委員会)

■欠席届出者 10名

猪股 末男 伊東 巖 風間 茂穂

北村 幸彦 中山順一郎 奥田 文夫

奥木 博勝 坂田 育男 高野 範城

新海源四郎

◎留学生近況報告 メッテ・アルス・オールセン様

みなさんこんにちは。先週で学校も終わりましたので例会に来ました。この間、留学生のさよならパーティーがありまして10分間のスピーチをしました。ちょっとさみしかった。昨日は田園調布で留学生のみなさんと宿泊しまして、朝の6時までお話をしました。みんな良い友達だから、さよならは大変さみしい。でもあと3週間ほど日もありますし、今日からお父さんとお母さんが10日ほど日本にいますからうれしいです。

( 寄 稿 )

交換留学生 鈴木なつみ

皆様お元気でいらっしゃいますか。私はとっても元気にクリチバライフを過ごしています。先々月は、私の誤りで期限までに報告書が届かなかったことを深くお詫び致します。

さて、今月は同じくブラジルでも第2日曜日に母の日がありました。その前の日の土曜日に両親に“妹(7歳)の学校に行こう”と誘われ、何があるのかわからずついて行ってみると“母の日おめでとう会”(私が付けた名前)があるということでした。私たち家族のほかにもたくさんの家族が来ていて、“そうかあ母の日か…”としみじみしながら子供たちがお母さんの為に歌ったり踊ったりしているのを見ていました。会が終わると子供たちは一斉にそれぞれのお母さんの所へ来てキスをしていました。妹も同じくお母さんの所へ来てキスをしていました。私はそれを見てしみじみしてたのが、ジーンときてしまい、思わず涙が出てしまいました。“ホームシックになんかならないよ”とは言ってきたものの、いざ離れてみると寂しいもので、言葉ではコントロールできても体の機能ばかりはコントロールできませんでした。でも正直言うと、家族には会いたいけれども日本には帰りたくないというのが本音です。

最近、妹たちが私に慣れてきてよく話しかけてきてくれます。言葉の勉強になるので良いのですが、慣れてくると一緒に遊ぶようになって…。子供と遊ぶというのは何て疲れるんでしょう。“あれやって!”“これやって”と次から次へと注文され、あきるとすぐどこかへ行ってしまいます。一人残される私はいつも最後に寂しい思いをします。この前、一緒になってはしゃぎすぎた為、筋肉痛になってしまいました。弟(11歳)は恥ずかしがり屋であまり話をしませんが、時々日本で流行っていたアニメがブラジルで放送されているので、それについて話したり、ゲームの中の技の名前で盛り上がったりしています。これからも弟妹たちと筋肉痛にならない程度に仲良く遊んでいきたいのです。

それでは今回はこの辺で失礼いたします。来月は7月の旅行に向けて準備を始める予定です。みなさまお体に気をつけて…。

(今週の担当：飯島 裕美)

## 【卓 話】

「我が国の食糧自給問題について」

(株)ペルプランニングシステム代表取締役  
見城美枝子様



みなさん、こんにちは。今日はこのような会合にお招きありがとうございます。また、私の時間の都合でお食事の最中ということで本当に申し訳ありません。生ものはこの季節すぐにおいしくなくなりますし、お寿司っていうのはもともと握ってもらいながら食べるのが一番おいしいといわれていますので、どうぞ遠慮なくお箸を動かしながら、お話を聞いていただければと思います。

今日、私はちょっとミスをいたしまして、橋本まで行ってしまいUターンしましたので、30分ほどロスをしてしまいました。おかげで、ちょっとゆっくりとこの辺を電車の中から見せていただきました。

今日は農業についてお話しいたします。私自身は農業をやっていません。しかも今、大学院のほうで専攻してますのは、理工学部の日本建築ですから、全くもう農業と関係ないっていえばそれまでです。学部は英文学ですから、それもまたほんとは関係ないんです。自分自身が若いときは「食」について全く考えなかったんですが、子どもを持つようになりましてから、やはり食の大切さというのを考えるようになりました。食に関心をもつようになりしたのは、本当のことを言いますと子どもを持ってからというより、赤ちゃんができる前なんです。男性はちょっと違うかもしれませんが、女性の場合は自分の身体の中で赤ちゃんを育てて産むのですから、母胎の健康っていうことをとても考えるようになります。

それまでは、海外をグルグル巡る仕事でしたので、どこへ行ってもなんでも食べないと生きていけないということで、得体の知れないものをあっちこちで食べ、取材をして歩

いておりました。そういう中からだんだん外へ行けば行くほど、海外へ行けば行くほど、日本というものを考えるようになりました。実際に行った国はまだ53カ国なんですけれども、世界は広いですから、もっともっと見てこなければ世界と日本を比較するのは難しいんですが…。ひとたび出かけると1カ月ぐらいかかる仕事でしたので、その国で食事をし、文化に触れ、その度に日本人である自分を意識せざるを得ないようなことが続きます。なおかつ、ある時、子どもを持つと決心したときから、自分が食べているものでお腹の子どもが育っていくものですから、無農薬で、有機農法で、あんまり添加物のないものにしたいという考えになりました。

よく有名人の女優さんやタレントさんが、「無農薬の有機農法でやってます」とか、最近はある程度ファッションのひとつになったんですが、私がはじめました頃はまだまだ知られていなくて、ほんとにごく少数の人だけが、そういった形で食に関心を持つという状況でした。

どのくらい関心がなかったかと言いますと、厚生省のいろんな委員をやらせていただいたんですが、食に関する委員会、大学の専門の先生たちと一緒に委員会を進めているときに、農業や添加物のことを申し上げると、だいたい専門の先生が、「あなたは神経質すぎる。だいたい安全な食品とか、健康食品とか、食品に健康とか安全とかをつけるのはまやかした」とおっしゃいまして、言われてみれば確かにそうかもしれません。食品というのは食べられるものなんですから、もともと健康にいいというか、そんなところに、「健康」とか「安全」ってつけるのはおかしいと、よくご専門の先生から攻められたんですね。そういう先生方も、今から5年くらい前からは、率先して「食を考える何とか委員会」なんていうのを作りまして、「安全な食品を」なんておっしゃったり、「健康食品を」とか、「有機農法無農薬」ということを口にされるようになりました。そういう意味では時代が変わったと思います。私は、別に健康食品や有機農法等ばかりではありませんが、そういう関わりから日本の食糧事情というのをたいへん気にするようになりました。その関係で、「農業市民会議」の幹事ですとか、「日本ご飯党」の副党首ですとか、ボランティアなんですけれども、いろいろやらせていただくことになりました。

去年の秋に、カナダのケベックというところで、FAO国連の食糧農業機関という国際会議のシンポジウムがありま

して、それは設立50周年を記念するという会議で、私は、NGOの形で出席いたしました。ほかには、JAの豊田会長とか、そういったJA関係の会長クラスの方とか、農林省の方もちょっといらしたでしょうか、いろんな政府・行政・団体、それから私のようにフリーのボランティアといういろんな人たちが、参加いたしました。今度、イタリアのローマで食糧サミットが開かれます。これは本当に世界の食糧危機について、真剣な論議が行われるわけなんですけれど、その前に、世界の農業っていうのはどうあるべきか、世界の食糧っていうのはどうあるべきかっていうことで、ケベックで国際シンポジウムが開かれたわけです。設立50周年ということで、ケベックあげての盛大な国際会議でありシンポジウムでありましたが、その席で、どういうことが論じられたかっていうことと、それから、今ほんとに私たちはこうしてお金を出せば、どんなものでもだいたい手にはいるような日本の食糧事情ですが、実際世界の中でどうなのかということ、今日は短い時間ですけれども、私のそういったベースをもとにお話をさせていただきます。

日本がちょっと前にお米で迫られました市場開放について。これはみなさんもよくわかって、農業の方はどうしたらいいかと考えましたし、圧力がアメリカのほうから政府にかかりましたので、どうしてもマーケットはオープンにしなければならない、鎖国はやめろ、というような形で、迫られました。その時に、日本の中でも、こういうふう鎖国していると、鎖国といいますか市場をクローズにしておきますと、日本は世界に取り残されるという意見がよく出ました。私がわざわざカナダのケベックまで行って会議に参加した理由は、本当のところ世界のマーケットにおいて日本人たち、農業の人たちが心配していることは、ほんとに見当違いで、世界の国から閉め出されるのかどうか、それを確認したかったんです。行ってみますと実際会議では、多くの国が、食糧の自給をこれからは進めなければ、とてもひとの国に頼れる状況ではない、と考えているようでした。たとえば売りたい先進国は、簡単な言葉で申し上げますと「買え買え」とおっしゃっていました。実際に食糧の自給を凶ろうとする国は、食糧を一時的に大量に輸出されたんでは価格破壊がおこり、国内の農業を中心とした産業がとてもやっていけなくなるので、そういった国内事情を無視した、自給できるのに自給の芽を摘むような市場開放というのは問題があるのではないか、という意見が出ました。

最終的にいろんな意見が出たあとで、採択されたことをまず申し上げます。GATTウルグアイランドで、市場というのはもっとオープンにしなければならないという方向で動いたわけですね。ですから今さら、GATTウルグアイランドに誰も抵抗できないんです。もう決まってしまったものですから。それで、そこにいた人たちは全員非常に緊張いたしまして、言葉を選んで選んで…。つまりGATTウルグアイランドは、あれは間違いではないかということがみんなこの辺まで出ているんですけども、言葉にできないんですね。それでいろんな形で意見がだされました。まず一番貧しい国は食料を輸入したら助かるんじゃないか、と私たちはごく簡単に考えます。けれども、その国がおっしゃったことは、「私たちは自分の手で食糧を作りたい、そうでなければいつまでも安く買えるような市場ではないわけだから、自分の国がだめになるので、ぜひ自分の国が自立して農業ができるようなところまでは、お願いだから輸出国は一時的に安く輸出しないでくれ」と。「確かに自分たちは食糧に困っているけれども、できれば農業の自立できる基盤を作りたい、基盤ができるような形を取らせてほしい」というような意見をおっしゃっていました。それから、私たちの国のように経済的にもゆとりがあり、農業が今どんどんしぼんでいる国ですけれども、そういう国に対してどういう意見が出たかといいますと、「お金に任せて輸入するということは、その国の土と水を輸入することになる。それは、果たして今後の世界状況の中でいいことかどうか」という意見が出ました。ですから、私たちはついものを行ったり来たりさせれば儲かるというビジネスで考えますと、お金があれば売りたい国から買って、それはビジネスになるとお考えだと思うんですが…。

こういった意見が出て、結局、答申としてまとめましたのは、「最貧国に限り輸入制限をしていい」ということができました。日本のように経済が豊かな国は輸入制限はできないんです。ただし、「自国の資源を最大限に活用して食糧自給の途を保ちながら、なおかつオープンマーケットに対しても対応していく」という形での意見にまとまりました。今後の食糧輸入輸出問題に関してはGATTウルグアイランドがどのように対応していくかというのは、そういった考えが基本に動いていくと思います。

たぶん私がこんなことを申し上げても、別に買えばいいんじゃないか、と心の中でお考えになっている方が多々いらっしゃるんじゃないかと思ひまして、実際のいろんなデータ

を持ってまいりました。まずですね、ある時、お米を輸入するかどうかという激論を交わしたときに、中国に作らせればいいとおっしゃった政治家がいらっしゃいます。中国にはあんなに膨大な土地がある、それからアジアもある、と。タイとかああいうところで作らせればいい、ということが出たんです。中国はご存じのように、純然たる食糧輸入国になってしまいました。小麦に米、どちらももう輸入しております。

そして、基本的にここに関わるのは人口問題なんですね。ご存じのように1973年で人口が37億人になりました。そして1990年の段階で53億人です。そして、2010年で70億人というシュミレーションが出ております。2030年では90億人というシュミレーションです。このシュミレーションの出し方には、学者によって多少のズレがございまして、これを楽観的だとみる学者と、「そこまでは人口は膨大にならない、理由は産まれた子が飢えて死ぬ」という恐ろしいマイナスを入れて、それでこれくらいの人数にはならないだろう、という楽観的な見方をされる方もいらっしゃるんです。でも、37億人が53億人・70億人・90億人と20億人単位で伸びていくということなんですね。今日の日経新聞をご覧になった方いらっしゃいますか。で、それに対して、日本はアメリカが買え買えというものですから、アメリカから買えば文句はないんだろう、それによって情報産業が少し大目に見てもらえるのではないかと、といったことを考えている方も少しいらっしゃるようなんです。ところが、アメリカのストックは底をついてしまっています。15年以上の不作凶作が重なり、ストックが底をついてしまったということが明らかになりました。動物の飼料用の餌がないんです。とうもろこしもないんです。それはほんの一部のデータでありまして、出されていないデータはたくさんございます。それはパニックになるからなんですね。買え買えと言ってた国がないとなると、GATTウルグアイランドも危うくなります。また豊作になれば売りたいわけですから。でもこういった状況は想像がつくわけで、ものがあるときは食糧を売りたいがるんですが、私は世界を回っていて、「ものがなくなったときにまで日本に売ってくれる国はない」これだけは確信しております。

今日私の申し上げることは全部忘れて結構なんですけれども、53カ国まわってきた私のわずかな経験からいえることは、人種差別はほんとにいっぱいあります。はっきり言って私たちはイエローです。ホワイトではありません。よく

アメリカの社会に入り込んで、ホワイトだと色々なわれますけれど。ちょっと前の自動車産業の問題の時も、「ジャップ」という言葉を使われたのをニュースでご覧になりましたか？

私は国粋主義者ではありませんし右翼でもありませんのでいいんですけど、ただ、自動車産業の会長が「あのジャップが」というようなことまで言われてもニコニコしている日本人っていうのは、ちょっと忸怩たるものがこの辺に渦巻いております。やっぱり現実をきちんと見ないからばかにされるな、ということ海外に行ってみて感じます。やっぱりジャップなんですね。それからイエローです。ワップってご存じだと思いますが、ホワイトアングロサクソン、ピューリタンですね。白人で、アングロサクソン系で、ピューリタン系。このワップの人たちはやっぱりいやなんですね、カラーがついている人たちのことが。だから、プエルトリカンももちろんですが、ヒスパニック系もいやですし、アジアもいやです。はっきりいやなんですけれどもしかたがない。そういった人たちが、中枢を握っておりますので。よく日本からタレントさんやミュージシャンなどが、アメリカはやっぱり音楽を創りやすい、住みやすいとか言ってる言葉に惑わされると巨大なアメリカの姿が見えないんですが、それはやっぱりジャマイカ系とか、ラテン系とか……。イタリアですらイタリアンマフィアっていうのは軽蔑になるわけです。こわいけれども軽蔑してる。同じホワイトでもイタリア系はそういうふうに見られます。そういう中で私たちは、極東といわれる日本です。

私、学生時代に、ファーイーストネットワークという英語の放送をずっと聞いていて、ファーンとか言われるとかっこいつもりでございました。その意味すらも英語で捉えてしまって、ファッションのように捉えていたんですが、ある時はっきりわかって頭にきました。いつも日本で見ていた世界地図は、世界の真ん中に日本列島が赤で塗ってありましたが、ヨーロッパの取材の時にあちらをずっとまわらなくてはいけなくて、国境を越えていくものですから、むこうで世界地図を買いました。見たら日本が見つからなくて、ないじゃないかと慌てましたら、ファーイーストネットワークにちゃんとありました。「極東」まさに一番はじつこの東、それはイギリスを中心に考えてのファーイーストですよ。ファーイーストってこういうことかと思いました。それはコンプレックスではないのですが、そんなことも気がつかずにいた自分が恥ずかしいといいますが、なん

だったんだろうなという思いがしました。

そういうふうの一つ一つ考えると、あちらが中心であって、日本人が国際的っていうときは、いつもアジアや隣の中国などはドンと抜けておりまして、欧米が国際的っていうことになります。私が取材してきたなかで、むこうから、国際的とか国際人という言葉が出たことは1回もないんです。日本ではすぐ、国際的、国際人という話が出るんですが、欧米で取材したときには一度も出たことがなくて、はて、どういうふうに訳そうかと悩みました。インターナショナルって通じませんので、どうしたらいいんでしょうね。それくらいむこうの人にとってはむこうが中心ですので、国際人になる必要がないんです。ですから、国際人、とっている間は、やはり日本が極東にあって欧米を仰ぐように見て、マイケルジャクソンではありませんが、なんとか自分たちの肌の色までなるべく白くして、身の動作を白人ふうにして追いつかなきゃならないと思っていてその現れが、国際人・国際社会という言葉に出ると思います。

そういう中で、どの国も食糧というのは自分の国できちんと守っている、ということは確信できます。それを、自給率でみてみます。フランスは143%の自給率です。フランスが核実験したとき、あのピキ二環礁のあたりというのは別にかまわないわけですから、やってしまったんだろうなという大変悲しい残念な気持ちですけれども、あそこに住んでいる私たちと同じような肌の色をした人たちは、無視されたわけです。どうしてフランスがあんなに強いのかというときに、どこからどう攻められようと、あの国は143%の自給率で生きていけます。純然たる農業国なのです。スペインからピレネー山脈を越えまして国境を越えてフランスに入った経験がありますが、行けども行けども農地でした。パリのようなフランスの都会しか知らなかった私はある種のカルチャーショックを受けました。アグリカルチャーショックです。フランスが143%、アメリカが113%、旧西ドイツが94%、イギリスが73%、スイスが65%の自給率です。日本は穀物だけでも23%を切りましたので、だいたい口にする3分の1を切ったものだけが日本で作られているものだということです。

それから、日本は備蓄もしておりません。スイスでは憲法で備蓄が保障されておりまして、全国民の3年分は備蓄しております。あの国はきれいな国であがれますが、国民皆兵でみんな屋根裏などに兵器をおいております。またスイスの道は非常に広くできております。いざというときに

それは滑走路になります。飛行機が飛び立てる滑走路です。それから途中に、ある装置が施されておりまして、ある事態が起こりますと、道がほこほこ打ち砕かれて普通の車や、装甲車でもなかなか通れないようにし、外からの侵入を防ぐようになっています。そして3年間は籠城しても大丈夫、という状況の備蓄をしています。

スウェーデンは1年間分です。輸入が20%か30%に低下してきて、今、自給の途をたどっています。ドイツは半年分。イギリスは、いまだに「戦時に備え」という言葉が使われ、全国各地に備蓄してあるということで、イングランド・スコットランドと分けて備蓄しています。

日本の土地は地球全土の0.24%です。人口は世界の2.3%にあたります。世界の農産物の輸入の8.4%を日本が取っています。自分たちの人口は2.3%なんですけれども、10割弱の8.3%も食糧を取っております。人口は増えて農業人口が減っている中で、日本はどう考えるべきかということがあります。

世界の人口の増え方は、アルゼンチン一国分が毎年増えている、というのがシュミレーションでいわれています。日本は少子化ですから、人口が増えるっていうことの実感がないですね。しかし世界では、フランスかアルゼンチン一国分の人口が増えてるといわれます。

アンケートによると、日本人の77%は次の世代のために国内生産で自給できる日本でありたい、と考えています。しかし、現実には農業離れをしています。理由は農業が成り立たないからです。どうして成り立たないかというと、ご飯は1杯約25円なんです、コーヒーは1杯400円くらいということで、お米はそれだけ価格が据え置かれています。やはり国民が食べる一番基本的なものですので安定を図っているわけです。でも、農業は色々補助金もらってるじゃないかといわれますが、ちなみに日本の農地の価格はアメリカの75倍です。だから日本の高い農地でやる必要はない、安い農地で作らせればいいとか、アメリカの75倍にもなる農地の価格をどうお考えになるか、ということは何かの機会にお考え頂きたいと思います。人件費はタイの45倍ですのでタイのお米が安いのは当然です。では、タイの人々がタイのお米を買うと安いかというと、安くないんです。タイの人々にとってはやはりお米は高いんです。ですから、ここで非常に日本人のアンバランスというか、自分たちは高給取りで、1カ月で1年以上のお給料を取っているわけですよ。このような会合でかかる費用といえばタイの人々

にとっては大変な額で、一生使えないかもしれない。ところが、お米を買うときは日本のお金で買うという感覚ですので、タイのお米は安い、というんです。しかし、低所得で買うタイの人々は、これ以上輸出にまわって自分たちのお米がなくなって高くなるのは困る、と言っています。

もう一つ、水田というものを私たちはすっかり忘れていきます。このあたりは丘陵地でしたから違うかもしれませんが、関東平野などの水田があるところの人は「まだ田圃がある」と、かつては卑下をしておりました。しかしこれからの都市計画というのは、ある部分は農地があって、一体化した都市化でないと時代遅れになるわけです。それは、都市というものがもう機能を失っておりまして、孤立していく状況です。都市だけをつくっていきますと究極は人が住めないものになってドーナツ現象が起きるんです。

たとえばアメリカの状況ですが、ニューヨークのマンハッタンはもう住めないといわれて、人々はクウィーンズ地区のような郊外へ郊外へと移っていきます。そのような現象が今崩れてきています。郊外へ移るとまたそこにカラードの人たちが来て、それがいやで白人の人たちがまた出ていく、ということくりかえしていきます。そして、空洞化します。住みやすい都市は、皆さんのようにごく普通の常識を持って、経済的にある豊かさを持って、判断ができていう人たちが住んでいないと街は壊れるんです。アメリカの都市計画の中でよく出てくる言葉に「オーディナリーピープル」というのがあります。「一般の人たち」と訳するのが一番いいんですが、そういった一般の住民のパーセンテージが減るところから、治安がグッと悪くなるということがはっきりデータに現れました。一般の人たちが、あるパーセンテージより減りますと、完全にその街は住めなくなります。それを繰り返して、今とんとん街から人が遠ざかっている状況です。日本でも東京の都心は今ぎりぎりのところはなんですけれども。

そんな中で、やはり人工的につくられて住みやすい都会ではなく、そこに水を補水し、緑があって…。昨日も、どうして森と林を町中に持ってくるかという森林のシンポジウムをやったんですけれども、緑が遠くなるというのはやはり人間にとってもよくなくて、水田があるほうが実は助かっているんです。実は、今ある水田は、東京都民の水の使用量の37年分を貯水しているんです。水田の別名は、田圃のダムっていわれるんですけれども、人工的につくったダムよりもよく貯水してくれています。この水田を全部つぶし

てその分をダムで作らないといけないとすると、だいたい4兆7000億円かかるといわれております。水田の効用というのを私たちは忘れていますが、もともと農耕民族である私たちの心に景観というものを無料で与えてくれます。

日本の農業人口は、1億2000万人のうちの10%程度の1500万人くらいです。この10年で80万戸減りまして、今344万戸といわれていますが、これでは日本は生きていけないので、農業の再編が行われると思います。

もう一つ重要な問題に、砂漠化があります。2010年までに地球上の土地の30%は砂漠化の影響を受けるといわれております。現実には日本の米を作ってくれるはずのカリフォルニアはもともと砂漠です。水を遠くから引いてきますので、カリフォルニア米の代金はほとんど水の代金といわれています。砂漠化の影響で、その水もなかなか引けなくなっています。日本のような、技術を持って耕しているというのは世界でも大変有数で希です。それは何にいいかという、土地を傷めないんです。カナダの小麦畑を取材いたしましたときに、どんなことが起きていたかといいますと、オンタリオ州は空から見ると全部小麦畑なんです、そのほとんどが、アメリカを中心にしたアグリビジネスに買われてしまっていました。自分の土地ではなくなってしまったことをカナダの農家の人々は非常に嘆いておりましたが、「巨大なアグリビジネスには負ける」と言っていました。何が悲しいかというアグリビジネスは一気にパーツとやっってしまうので、数年でその土地は使えなくなってしまうといえます。それで、また奥へ奥へと荒らしながら行きますので結局使えない土地になってしまうということです。もうひとつ、今ドイツマルクが強いので、ドイツもカナダに農地を買いに来ています。農地と牛ごと、今の年収の3倍・5倍で買うという値をかけてきてまして、カナダの酪農の家族もぼつりぼつりとぬけてきています。それはあくまでビジネスですから、国を思って、民を思ってというところは一つもないわけですし、結局ビジネスが成り立たなくなれば引き揚げていくわけです。そしてまた違う国へ行きます。はたして、そういったアグリビジネスに土地を託しているのかというのが現状までの問題点です。

食糧危機ということに関してお話しします。今、世界では、8億人が栄養不足になっています。これも、ダイエットの国日本では少しも痛くないことかもしれませんが、私が取材したアフリカなどではダイエットのダの字もできません

ん。今日生きるか、明日生きるかでやっておりますので、ダイエットに狂う日本はそのうち世界のつまはじきにあると思います。先ほど申し上げました砂漠化の問題ですが、日本の四国と九州をあわせた面積が毎年砂漠化している、という具体的なイメージを持っていただけたらよろしいと思います。

そして、お米の需要ですが、2025年には今の5割増しの7億6000万トン必要になるだろうといわれています。今、米の生産量は5億トンですので2億6000万トンは足りなくなる、といった状況です。ですから、日本の技術というのは、日本で作れなくても世界へ持っていくべきなんです。しかし、それにしても米の価格をタイと日本で比べてみてください。人件費がタイの40倍ということで考えていただきますと、1週間の賃金で買える量が、日本では200キロくらいですが、タイの人は100グラムくらいしか買えません。そういう違いを頭に入れていただけたら、と思います。今、日本のお金は強いですから、貧しい国へ行けばなんでもたくさん買えますが、その国の人が、自分たちが働いてその国のものを買おうとすると、ほんのわずかししか買えないということなんですね。

今までの話もたいへん駆け足で申し訳ないんですけども、時間がないので最後にもうひとつ。そういう中で、今、世界中で11億人が貧困にあえいでおります。1人当たりの穀物の消費量でみると、アメリカはやっばり浪費しております、800キロです。アメリカのような食べ方をしていると、今ですら、27.5億人しか生きられないといわれています。だから全部がアメリカのようですともうダメなんですね。イタリアは400キロですので55億人生きられますが、インドのように貧しい食べない国は、200キロくらいしか消費しておりません。ですから、インドのように暮らせば、地球は110億人抱えられるといわれているんですが、こういう生活をしている私たちは、できるわけないですね。ちなみに、日本は現在のところ300キロくらいの消費量です。ですからこのままダイエットをしていくと、世界のためにはいいということなんですけども…。

このような話を総合しますと、私の考えでは、日本は今かげりが見えてるといっても、経済的にはまだまだ奢り高ぶった状況が忘れられなくて、勢いがあるって浪費をしていると思います。それから、お金になるものはどうしてもビジネスにしていきますので、食糧輸入に関しては、いいじゃないかと…。大豆などは、ほとんど国産大豆はございません

が、輸入した大豆の恐ろしさというのは、食べない方がいいんじゃないか、といった状況です。私は、高い国産大豆の納豆を食べております。それでも、そんなことのできる状況もあとわずか、国産大豆もほとんどなくなりましたのでもうダメだと思います。

世界全体の会議にでてみましたところ、結果としては、「資源のある国は、最大限自国の資源を活性化し、有効利用して自給の途をたどりながら、世界の国際貿易にある程度寄与していく」、これが最終的にでた答申です。裏を返しますと、食糧危機が本当に迫ったときには、自国に土地があって耕せる国には、食糧はまわってこないと思います。GATT・ウルグアイラウンドは、食糧があるうちは買え買えといっているんですけども、食糧危機がほんとに迫ってきたときには「パット・ウラナイラウンド」だと私は言っています。食糧があるときは売るけれども、「しかし売らないラウンド」で自己の食糧を最優先にすることは、確実に明らかです。皆さんがそれぞれどのようなご職業か伺っていないのでわかりませんが、ビジネスでいるんなものを動かすのはいいんですが、自分たちの国が、次の世代が生きていけないようではビジネスも何もなくなります。イギリスは、サッチャーさんの時に相当自給率を上げ、今70%をこえました。鉄の女はいろんなことをしたんですね。このあいだサッチャーさんがいらしたときにお目にかかりまして握手をしました。握手握手で筋肉を切ったことがあるそうですね、ですから真綿のような握手で驚きましたけど…。イギリスの例でいいますと、自給率を上げた段階で経済力が立ち直りました。日本の経済が上向いてほしい、右肩上がりになってほしいとお考えの方ばかりだと思いますので日本の今後を考えるうえでは、イギリスの例なども参考に皆さんの立場から、農業というものを考えただければと思います。

今日は短い時間で、データをたくさん並べてしまいましたが、それぞれの中でお考えいただけるとありがたいと思います。どうもありがとうございました。

第273回(6/12)例会において  
(卓話担当：平野 行廣、飯島 裕美)